

来た、縫之助は心密かに喜悦び縫之助、何うやら本物になつて  
 来た、敵を計るは味方を計るにありとは此處の事だ、イヤ巧い  
 へ忘り勝ちと相成りました、縫之助の母増野も、初めの間は矢  
 張り敵を計る手段のみ思つて居りましたが、此の頃の品行は  
 以前とは宛つ切り變つて仕舞い、仇討の事を云ひ出して少し  
 も取り合はず、夫れのみならず世間では、縫之助の腰拔よ阿房  
 よ、現在目の前に仇を据へながら、彼の態は何んだと、口々に  
 罵るのを聞いては、最早や黙つては居られず縫之助、困つた  
 事じや、江戸詰になつて歸るものは、百人の中で九十九人迄、  
 身持を崩すのが常ではあるが、縫之助に限つて左様な氣遣はあ  
 るまいと、安心をして居たのじやが、此の頃の様な行狀では、  
 或は仇討も忘れたのかも知れん、今この間に意見を加へて置かぬ  
 と、取り返しの際か、事になるであらう」と、婦女心の淺基に

も、次男縫次郎、妻のお秀とも申し合せ、或日縫之助が道後よ  
 り戻つて來たるを待ち受けて、右左より取り縫り、口々に謀  
 言いたしますと、縫之助は醉顔を細目に開き縫之助、アハ、……  
 何事かと思つたら、又しても其の話し、此の間もお秀に云つた  
 通り、江戸詰になる迄は、田舎武士の堅苦しく、己れツ不俱載  
 天の父の仇と思つて居ました、都へ行つてから氣も大きくな  
 り、夫れに山本等の様子を見るに、兄金太夫の槍の門人が、皆  
 な加擔をして、イヤと云つたら直に討つて出る手筈になつて居  
 るとやら、左様な用心堅固な孫太郎を、武術も碌に知らぬ弟  
 縫次郎と二人で仇と覘ふのは、所謂螳螂の斧の世の喩へ、逆も  
 叶はぬ事を思い續けて、万一犬死でもしたら何うなさる、仇も  
 討てず母上を養ふ事も出来ず、不幸に不幸を重ねる道理、若し  
 又幸いに仇を討つたにしたら處で、足輕の身分として士分の者  
 生命を取れば、死罪を申し付けられるは知れた事、左様な引き

合はぬ事に苦勞しやうより、毛頭恨みはないと請書を出してあ  
 るのだから、其の御趣意に背かぬが上への忠義、世間の者が何  
 んな悪口した處で、無事息災が何よりでござる、母上もお秀も  
 弟も、余り堅い事は思ひ止まり、心を廣く持たんと壽命の毒  
 ア、睡むい、お秀鹽茶じや、母上御免下さいませ」と  
 云ひ据て、横になるが早い、正体もなく高野、グウ、と寝  
 込んで仕舞いました、増野も今は待て余し、安田兵左衛門を呼  
 び、やり、様々に意見を加へました、縫之助は馬耳東風に聞き  
 流し、更らに取り合ふ景氣はありませぬ、母の増野は愈々愛想  
 をつかし、増野最ふ、此の上は是非がない、斯んな性根の腐つた  
 奴と一緒居つては、却つて病氣が重くなるばかり寧ろ隠居を  
 して、浮世の事を夢と諦め、菩提の道に入らば、増し……」と、  
 お秀縫次郎の留め、聞かす、亡夫太夫の位牌を抱き、娘妙  
 海の居ります、眞成庵へ歩つて参り、夫より後は朝夕忠太夫の

位牌に打ち向い、念佛三昧に泣き暮して居りますと云ふ、益々  
 六郷縫之助が苦心慘憺なる艱難のお物語りは、一寸吸呼入れ  
 まして、次席のお樂み……。

第十六席

お話し替つて、此處は松山城下中の川筋の一軒家、表は格子造  
 りにて、手狭なれども立派な構へ、之れぞ山本孫太郎の愛妾お  
 六の宅でございます、今しも座敷の真中には、山本孫太郎が  
 撥乎と座を占め、其の左右には同じ悪徒伊藤助八郎、前並宗太  
 郎、竹中常次の三人居列び、酒汲み交はして、何か密々と囁き  
 合つて居ります、此の時山本孫太郎は杯を下に置き、山本各々  
 彼の六郷縫之助、江戸から戻つて以來は、以前の品行とは雲  
 泥の遠い、毎晩道後の遊廓へ入り込み、富榮奴に精神を抜かし

て居るそうだが、彼れが眞實であらば、安心と云ふもの、然し  
 武術と云ひ、器量と云ひ容易ならん奴であるから、或は我々を  
 油断さす計略かも知らん、何うかして奴の胸中を探る工夫はあ  
 るまいか、若しや偽りなら此方にも夫れ相當の手段がある」と  
 云ふを聞いたる伊藤助八郎は、呵々と嘲笑い伊藤アハ、  
 之れは若先生にも似合はぬ仰せを承はる者かな、御身は家に傳  
 はる高田流の槍の極意を極め、然も我々初め門人一同が、一命  
 を抛つて守護して居るのであるから、高が足輕如きの六郷縫之  
 助、少々の武藝があるとも、何條恐るゝ事のあらんや、決して  
 心配無用、心易く思はれよ……」と、云ふを押し止め前並宗太  
 郎は宗太イヤ、伊藤待て、小敵と見て侮る事勿れ、千丈の堤も  
 蟻の一穴から潰るゝと云ふ比喻もある、油断は大敵、用心の上  
 にも用心すれば間違いはない」と、云ふ尾に續いて竹中常次も  
 竹中ウム、如何にも其の通りだ、若先生……イヤナ孫太郎殿、

夫れ程心配に思はれるならば、斯様くにして縫之助の極意を  
 探つては如何でござる……」と、孫太郎の耳に口寄せ、何かボシ  
 ヤく云つて居る、孫太郎は満面に笑を含み孫太成程、夫れこ  
 そ天晴の名案、伊藤、前並近ふ寄れ……」と、兩人にも囁きま  
 すと、二人も手を拍つて賛成なし、尙ほも手筈を示し合せて居  
 る、然るに此方六郷縫之助は、今宵も道後の遊廓に入り込み、  
 富榮を呼んで差し向いとなり、自分尺八を吹き、富榮は三味  
 を鳴して、面白く酒酌み交して居ります折柄、隣座敷には七  
 八人の客が、ドロツクドンの大騒ぎ、踊る跳ねると云ふ有様で  
 ございまして、何うした拍子か、間の襖がパツタリ倒れ、途  
 端に轉げ込む二人の男、縫之助、ヒョイと顔見合せて、甲イロ  
 し、六郷ではないか、之れは何うも思はぬ處で……失禮をして  
 濟まん縫之ナニ、失禮はお互いだ、飛んだ處を見付けられて、  
 イヤハヤ面目ない次第」と、云へば隣り座敷の連中はドヤ

と這入つて参り、甲「オ、六郷氏か、何處の御大身かと思つたら、貴殿であつて仕合せ、知らぬ仲ではなし、同席をしやふでないか、△ウム、宜かろう、……」と、迷惑そうにして居る縫之助に構は、いこそ、間の襖を外して仕舞い、縫之助を押しつ取り圍んで、唄ふやら踊るやら、傍若無人の亂痴騒ぎ、中にも一人の男は縫之助の側に蹴り寄り、甲「アイヤ、六郷氏、現在親の仇を目の前には置きながら、之れを討つて怨みを晴らす心もなく、毎日毎夜遊廓に入り浸り、酒と色とに精神を抜かすとは何事だ、之では我々足輕組の面穢しと云ふもの、左様な大腰抜けの臆病者は、顔を見るも汚らわしいわい……」と、云へば一人は押し止めの乙「イヤ、左様云ふものではない、六郷氏は斯ふして身持ちを亂して居るのは、全たく敵に油断を爲す計略であらう、如何に六郷氏、左様ではござらぬか……」と云へど

縫之助は少しも取り合はず縫之助ア、お待ち下さい、肝心の某より、皆なが力味出しては堪らん、亡父の忠太夫が山本孫太郎殿に手討ちに逢つたのは、詰り親父の不調法、夫れを恨むは間違の親玉、ヨシ又仇と規つた處で、向ふは大身の上に武藝、御指南役、見る影もない足輕風情で、仇討が出来る譯の者ではない、左様な劔呑な事をしやうより、氣樂に暮すが極樂浄土、之れ、富榮、何を益棒いたして居る、早く酒を酌がんか世の中に酒と女は仇なり、何うぞ仇に廻り合いたい、親の仇討より、此方の仇討が結構でござるてや……アハ、……」と座にも居堪らず其の場に打ち倒れ、早やグイ、と空財、一同は顔見合して四邊を取り捲き、甲「之れはしたり、六郷氏、余り云へば卑怯な振舞、今云つたが本性なれば、犬猫にも劣つた奴、面を見るも胸糞が悪い」乙「ヤ、酒を頭から打つ掛ける、又一人は者の骨を口に摺り付け、乙「ヤ、六郷、犬猫同然の奴なら

六郷縫之助

(二〇二)

ば、此の骨が分相應だ、サア喰へ……喰はぬか……」と、罵り  
騷いで、徳利を取り上げ、襟首より酒ツギ込むもあり、盥を引  
つ張る奴、顔に青痰吐き掛ける奴、有らん限りの亂暴狼藉をい  
たしますすが、縫之助は此處ぞ堪忍の大事の場處と勘念して、少  
しも頓着せず、正体もなく寝た振りをして居る、足輕一同  
は之れを見て、△「ヤア、斯んな腰抜けと同席するも汚はしい、  
サア元の席へ歸つて、一杯呑み直そう」と、口々に悪口雑言を  
吐き散らし、縫之助の頭を蹴り付け、ドツとばかりに引き取り  
まする、何故足輕組、斯かる狼藉に及んだかと申しますと、之  
れぞ山本孫太郎等に頼まれ、縫之助の本心を探る爲の計略で  
ありまして、伊藤、前並、竹中の三人は、矢張り此の樓に来て  
居つて、一間隔てし次の席で、始終の様子を窺つて居りました  
が、縫之助が性体なき有様を見て、互いに胸撫で下し、直様此  
の事を山本孫太郎に注進なし、四人は大いに喜びんで居る

六郷縫之助

(三〇二)

左様な事は先の先迄見通して居る六郷縫之助は、斯様な亂暴狼  
藉に遭つても、別に面目ないとも見苦しいとも思はず、相變ら  
ず遊廓通いを續けて居りまするは、實に胸中の苦心左こそと思  
い遣られまする、夫れに引き代へ、縫之助の宅に於きましては  
妻のお秀は身も世もあられずお秀ア、何うして彼んなお心に  
お成り遊ばしたであらう、迎も人間の力で御改心をおさせ申  
す事は出来まい「オ、左様じや、此の上は神佛のお蔭を蒙むつ  
てなりと、飽迄御本心に立ち直らせ、亡父上の仇討をお遂げな  
さる様、一念籠めてお願い申そう……」と、覺悟定めて其の晩  
より、晝尚ほ物妻き道後湯月八幡宮へ参詣いたし、神前へ願  
て合掌なし、一心不乱に祈願を籠めお秀何うぞ、良人の身持ち  
を改心なさしめ給へ、首尾能く仇討本懐を遂げます様、偏へ  
に神の御力を以つて、御願い申し上げます……」と、繰り返し  
禮拜頓首に及び、三七二十一日の間、雨の降る夜も風吹

く晩も、怠らずお詣りをいたしまして、丁度二十一日目の晩になつて、今夜は満願の日である云ふので、何日もより早く参詣して、一生懸命に脇目も振らず祈じて居ります折柄、社の背後の笹原に押し分け、ヌツと現はれ出でたる三人の曲者あり、何か互いに囁き合い、拔足差し足お秀の背後へ窺い寄り、矢庭に手を捉へて右左より引つ立てんとする、お秀はアツと驚いて捉られたる手を拂り放しお秀ア、若し、滅相な事を爲さいますな、御無禮にも程があります」と、云ひつゝ、弱味を見せじと、侍つと身構へると、三人は各自に頬冠りを脱ぎ捨て、伊藤コレお秀どの、我々三人は豈夫見忘れはなさるまい、篋と顔を御覽下さいと、云はれてお秀は怖々ながら、月に透して能々見れば、之なん余人にあらず、伊藤助八郎、前並宗太郎、竹中常次等の三人でございませうから、お秀ヤ、御身等は……」と、思はず叫んで仰天なし、バラリ其の場を逃げ何さんとする、三人は慌

て、引き留め伊藤ヤア、何處へ、逃がしてなるものか、之れさお秀どの、先年西山の花見の節、山本の若先生と一緒に、一寸お目に掛つて後は、御縁が無ふてツイ御無沙汰……前並承はれば、お秀どののは三百石の家を振り捨て、見る影もない足輕の處へ嫁入りをしられたとやら竹中蓼喰ふ虫も、好々云ふ世の喻はありますが、物好にも程がある、其の又戀舞の六郷縫之助と云ふ奴が、人並の人間なら兎も角、成程男振りは立派だが、人に親を打たれて、仇を討つ心もなく、此の頃では松ヶ枝の遊廓に入り込み、俵屋の富榮と云ふ女郎に精神を奪はれ人に犬畜生扱いを爲れても、蛙の面に水同然、耻を知らぬ腰抜け武士……伊藤オ、左様だ、左様な馬鹿者に連れ添ふて居るよりは、大極上に無類飛切と云ふ、立派な殿御を我々三人が媒介申そう前並其の殿御と云ふは余人でござらん、今回新知二百石を頂戴して、お召し抱へに預つたる、槍術の大先生山本

六郷縫之助

(六〇二)

孫太郎殿でござる、何んと不足はござるまいがな、牛を馬に乗り替へるが當世風、明日とも云はず今此處で、其の鞆殿に見合をするも、万更ら憎ふはござるまい……」と、口々喋り立てるを聞いたお秀は、恐ろしさも打ち忘れ、赫つと柳眉を逆立てる。お秀お黙りなさい、良人ある妾を捉へて手込めにしやうとするのみか、山本孫太郎の良人非人を鞆に世話するなぞとは汚はしい、婦女でこそあれ安田兵左衛門の娘お秀、慮外を召さると許しは置かぬツ」と、死方を出して取られし腕を振り拂い、手早く懐劍抜かんとするを、何んしろ相手は三人の無茶苦茶者、突然飛び掛つて押へ付け伊藤ヤア、優しく云へば附け上り、及物を叶へさすのだ、ツレ纏り上げて仕舞へいッ」と、孫太郎殿に思いの折しも、又もや傍への笹原押し分けて、現はれ出でたる大男は、之なん余人にあらず、悪人山本孫太郎でござる、

六郷縫之助

(七〇二)

八丈の衣物に白博多の帯を締め、朱鞘の大小刀を落し指し、ソリくご夫れへ立ち出で山本アイヤ、各々、思ふに増したる手剛き婦女、迎も尋常では諾と云ふまい、猿轡を啣めて社の裏へ連れ込み、某が一番槍の功名して、後は各々の勝手次第、ソレ早く……」と、颯で指令をする、三人は大喜悦び伊藤「イヤ、合点承知ツ、我々も相伴に預る事が出来るとは忝ない」と、手早く手拭以つて猿轡を啣め、藻掻き狂ふを事もせず、手取り足取り引つ擔ぎ、情け容赦も荒々しく、社裏山差して連れ込みますと云ふ、サア貞女お秀の身の上は如何相成りませうか、引き續いて申し述べたふはござるまい、遺憾ながら最早や紙数の制限りと相成りませんでしたるに付き、本編は一先づ此の邊にてお預りといはし、不日後編を「六郷武勇傳」と、演題を表はし、縫之助が首尾能く父の仇山本孫太郎を討ち取り續いて之れに加擔の伊藤、前並、竹中の三人を追跡なし、諸國

漫遊の件より、結局の詰りは江戸表に於いて、旗本八万騎の  
 一人に取立てられ、大いに其の武名を現はします。お物語り  
 詰り討をする事二度の其の間には種々様々なる珍説奇談、義  
 理と人情の實に面白き大眼目、足輕より一足飛に旗本に出世し  
 やうと云ふ、古今稀なる武士鑑、何うか其のお積りで、後編  
 の出版いたしたる際は、前編とお引き比べの上、相變らず  
 御愛読御賜采を願つて置きます、懽御退屈……。

忠孝烈六郷縫之助(終)

明治四十四年八月十七日印刷  
 明治四十四年八月廿二日發行

講談小説  
 大阪出版協會  
 (助之縫郷六)

口演者 玉田玉秀齋  
 大坂市南區東新瓦屋町二百二十六番邸  
 發行者 矢島嘉平次  
 大坂市南區東新瓦屋町二百二十六番邸  
 印刷者 梶原謙吉  
 發行元 誠進堂書店  
 大坂市南區心齋橋通鹽町北入  
 電話南二七六番  
 振替口座大阪壹貳四番

大賣所

島ノ内同盟館  
 柏原圭文堂  
 博多成象堂  
 岡本増進堂  
 名倉昭文館

駿々堂書店  
 井上一書堂  
 松本金華堂  
 此村欽英堂  
 立川文明堂

岡本偉業館  
 積善館本館  
 中川玉成堂  
 樋口隆文堂  
 誠進堂書店



錄目賣發說小談講刊新本製紙上

神田伯龍口演 丸山平次郎速記	美孝子 談子	植木屋春吉	正價 金參拾五錢 郵送料 金四錢
玉田玉秀齊口演 山田唯夫速記	清水寺 奇談	さくら姫	正價 金參拾五錢 郵送料 金四錢
玉田玉秀齊口演 山田唯夫速記	清水寺 古跡	轟坊清玄	正價 金參拾五錢 郵送料 金四錢
玉田玉秀齊口演 山田唯夫速記	女むら	雲お秀	正價 金參拾五錢 郵送料 金四錢
玉田玉秀齊口演 山田唯夫速記	日光山 大仇討	明星金吾	正價 金參拾五錢 郵送料 金四錢
玉田玉秀齊口演 山田唯夫速記	東名所 梅若塚	梅若丸	正價 金參拾五錢 郵送料 金四錢
玉田玉秀齊口演 山田唯夫速記	美勤 談王	松若丸	正價 金參拾五錢 郵送料 金四錢

大 阪 市 南 區 心 齋 橋 通 鹽 町 北 入

矢島誠進堂書店

電話二南七六番 振替時口座大版一四番

錄目賣發說小談講刊新本製紙上

神田伯龍口演 義 丸山平次郎速記 俠 <b>大八の助八</b> 正 價 金參拾五錢 郵送料 金四 錢	玉田玉秀齊口演 傑 山田唯夫速記 傑 <b>荒尾龍之助</b> 正 價 金參拾五錢 郵送料 金四 錢	玉田玉秀齊口演 山田唯夫速記 安宅の關 大仇討 <b>荒尾義勇傳</b> 正 價 金參拾五錢 郵送料 金四 錢	玉田玉秀齊口演 山田唯夫速記 <b>全 續 編</b> 正 價 金參拾五錢 郵送料 金四 錢	渡邊默禪著 小 <b>天狗武士(前編)</b> 正 價 金卅五錢 郵送料 金六 錢	渡邊默禪著 小 <b>天狗武士(後編)</b> 正 價 金卅五錢 郵送料 金六 錢	玉田玉秀齊口演 忠孝 山田唯夫速記 義烈 <b>六郷縫之助</b> 正 價 金參拾五錢 郵送料 金四 錢	玉田玉秀齊口演 忠孝 山田唯夫速記 義烈 <b>六郷武勇傳</b> 正 價 金參拾五錢 郵送料 金四 錢
--	--	--	--	--	--	--	--

以下 每月 新刊 發行 仕候

入北町 通橋 齊心 區南 市阪大

店書堂進誠島矢

番四二一一 阪大 店口 金貯 番 番六七二南話電



大改  
律道重裝



097855-000-2

特9-431

六郷縫之助 (忠孝義烈)

玉田 玉秀斎 / 講演

M44

DBS-1803

